ーただキリストと共に歩むー

水戸無教會

編集　半田梅雄

第十四号

イエスに失望した人々

ーー命のパンーー

半田梅雄

ヨハネ福音書、六章に五千人のパンの奇蹟（他の三福音書共通）があるが、これに続いて、群集とイエスのパン問答がある。イエスは「わたしは命のパンである。あなたがたの先祖は、荒野でマナを食べたが死んでしまった。しかし天から下ったパンを食べる人は、決して死ぬことはない。わたしは天から下ってきた生きたパンである。それを食べるものは、いつまでも生きるであろう……。」と云われた。これに対して人々は「この人はどうして、自分の肉をわたしたちに与えて、食べさせることができようか、」と論じあった。そこで又イエスが云われた。「よく云っておく。人の子の肉を食べず、また血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない……云々」これには弟子たちのうち多くの者も驚いたらしく、「これはひどい言葉だ。だれがそんなこと聞いておられようか」とつぶやきあった。イエスはこれを見破って更に云われた。「人を生かすものは霊であって、肉は何の役にも立たない。わたしがあなた方に話した言葉は霊であり、また命である……」「それだから父が与えて下さったものでなければ、わたしに来ることはできないと云ったのである。」

それ以来、多くの弟子たちは去っていって、もはやイエスと行動を共にしなかった。そこでイエスは一二弟子に云われた。「あなた方も去ろうとするのか」

ここに私たちはキリスト教の現世との交渉を、そしてその結末について、典型的な失敗事例を見るであろう。外ならぬイエス御自身の伝道に於て、かくの如き美事な失敗が、ここにはある。

そしてキリスト教の本質と人間の罪（目指す方向）とを考えあわせれば、これは又実に止むを得ない当然の帰結と云えるのである。何故なら多くの人々の求めているものは外ならぬ肉のパンであり、現世の繁栄であるからである。

この世の生活の不満や不足をキリスト教によって補って貰おうとする人たちは、今もイエスにつまづき、イエスと行動を共にしなくなる人々が、毎日出たとしても怪しむに足りない。

唯私たちは強く深く思う。「人を生かすものは霊であって、肉は何の役にも立たない」と。そして「あなた方も去ろうとするのか」とイエス様に声をかけられるものにならぬように切にいのるのである。

ヨブとパウロ

―ヨブ記研究（八）―

大森孝夫

前回に於て私たちは一章二十一節のヨブの言葉「我、裸にて母の胎を出でたり、又裸にて彼處に帰らんエホバ与えエホバ取りたまふなり。エホバの御名は讃むべきかな。」を通しまして、彼が如何に筆舌に尽し難き困苦、艱難、悲歌に遭うとも断じて全ては神の摂理の御手のうちにあることを確信し、エホバに対する烈々たる忠誠と心からの讃美を捧げ、以て「引っ込んでいろ、サタン（前号巻頭言参照）」とサタンの陰謀を撃砕したることを学んだのであります。またこのヨブの心からの深く、勇壮な献身は純正な意味での日本武士道精神に相通ずるものがありかかることは、己の利益と保身、便乗のために現代の偶像、権力たるアメリカやソ連に対し身も魂も売渡して恥を知らざる人間には一切理解出来ないことも学び得たのであります。かくこれまでのヨブの苦難と言葉によりまして私たちは実に深い信仰を教えられ、ヨブはサタンを敗退せしめたのでありますからヨブ記の目的は達せられヨブ記はここで完了して良い筈であります。然し私たちはヨブ記四十二章のうち、ここはまだ第一章であり、ヨブの苦悶は実にここからスタートしていることを知るのであります。即ち光輝く歓喜のゴールは遥かに遥かに遠い彼方でありましてヨブの前途には暗黒の大砂漠が厳然と横たわっているのであります。では何故、ヨブ記はここで終らなかったのか。その理由として私たちは旧約の人ヨブの声をきくを暫時止めて、新約の人パウロの声をきいてみることにしたいと思うのであります。パウロは

（以下、破損）

献身し真の礼拝の生涯を送ったのであります。続いてロマ書十四章八節をご覧下さい。パウロはここで断固として次の如く叫びました。

「我ら生くるも主のために生き、死ぬるも主のために死ぬ。然れば生くるも死ぬるも、我らは主の有なり。」皆さん、彼のこの言葉は私たちに先に学んだヨブの言葉以上の力強さを以て肉薄してくるでありましょう。ヨブは献身の言葉を述べつゝ苦悶の真只中に突入していきました。然しパウロは平安と歓喜と希望のうちにかく力強く献身の言葉を発したのであります。その差違は何から来たのか。ヨブはイエス・キリストを知らなかった！パウロはイエス・キリストを知りキリストによって救われた！

（以下、破損）

私はこの先生の言葉を終生忘れないでありましょう。誠に人生の多くの苦難、、苦悶もすべてはイエス・キリストを知らんがために与えられたものであると信じます。「我ら主の有なり」パウロはキリストを主と仰ぎ絶対にキリストに従いました。パウロはキリストによって己が罪が贖われたことを信じました。パウロは罪人を救わんとて独子イエス・キリストを十字架にかけ給いし義と愛なる父の神を信じました。パウロの神は、そして私たちキリスト者の神は「それ神はその獨子を賜ふ程に世を愛し給へり」という義と愛なる人格的な神であられます。然しこの時のヨブの信じていた神は全てを支配し給う全知全能なる神ではあるが

人の上に冷然と構えているような力と智慧のみの神であったのであります。キリストとキリストの父なる神を知らざりしヨブ！さればこそ彼は一章二十一節の言を述べつゝも全身全霊を挙げて悶え苦しみ、泣き叫んだのであります。実に「ヨブ記一巻四十二章、要するに是れキリスト降世以前のキリスト探究史」（内村鑑三）なのであります。

茲に於て私たちはヨブの苦闘に深甚の同情を表すると共にパウロの如く救われし我身の幸福を喜び、「我らの主イエス・キリスト及び我らを愛し恩惠をもて永遠の慰安と善き望とを与へ給ふ我らの父なる神」に対し心からの感謝と讃美を捧げなければなりません。またヨブの深刻、骨を刺す実験録を学ぶことによりまして、私たちの信仰が教義的、機械的、観念的信仰に非ずしてヨブやパウロの如き、生き生きとした実験の信仰でありますようにと祈り求むべきであります。

誰が隣人となったか

ールカ一〇・二九ー三七

此の「よきサマリヤ人」としてよく知られた物語の最后で、イエスが律法学者に向って「三人のうち誰が此の強盗に襲われた人の隣人となったか」と問われた時、自分の仲間が反隣人的である事を指摘された事に対して不快さと屈辱感を覚え乍ら、律法学者もサマリヤ人の名を挙げないわけにはいかなかった。

けれども一体、自分達の仲間ではないのみならず、常日頃軽蔑と反感とを以て接して来たサマリヤ人からあのような感動すべき愛をさし向けられた一人の人間、「ある人」とは何ものを意味するだろうか。

恐らく彼はある要件の為にエリコ街道を急いでいたに相違ない。しかしやがて人通りの全く見られない難所にさしかかった時に、忽ちして強盗共の襲いかゝる所となって、身ぐるみ奪い取られ、破れ傷ついて裸のまゝ放置されてしまい、やっと氣がついた時には、唯一人死人の如くに道端に横っている自分を発見し得たのみであった。しかも立上る事も、否動く事も出来ず、唯死を待つより外ない自分である事を意識した時に、再び世界が暗黒（まっくら）になってしまったに違いない。

人生の街道を或時は勇しく、或時は弱々しく、或時は急ぎ足で、或る時はのろのろと、或時は希望に胸を膨ませ乍ら、そして或時は悲しみと絶望とに追いかけられ乍ら、凡ての人が歩いて行く。しかし如何（どん）な時に、如何な形で、如何な所に障害が出現するかを誰がよく予期し得よう。あのパウロですら、ダマスコ街道を急行した時には、あのように意気軒昂たるものがあったにも拘らず、まる全く突然に、正にダマスコに到着しようとする直前に、強力な天来の光に照らし出され、彼は地に投げ出されてしまったのであった。

だが、我々を突然に襲って、地に倒れさせ、叩きつけてしまうものは光のみではない。疾病、災害、躓き、不和、虚偽、…何と様々のものが我々を捉え、叩きのめし、傷け、裸にしてしまう事であろう。そしてその時、我々自身も亦「わたしはなんという惨めな人間なのだろう。だれが、此の死のからだから、私を救ってくれるだろうか」という呻きを発せざるをえなくされるであろう。

然し、その時、一体誰がサマリヤ人として我等の前に現れてくれるのであろう。我々は先ず向うからやって来る立派な祭司に期待をかける。けれども、傷だらけでぶっ倒れている死にかけた人間を手にするには、彼は聖くあり過ぎた。そして次にレビ人、しかし此の父祖伝来の尊い職分に

は常に忠実である人種も、自己の任務を越えて困難な所に近づこうとはしない。

救の手をのべてくれる「よきサマリヤ人」は何処にいるのであろうか。祭司も、レビ人も、いかめしい律法も、勤勉な善き業も、茲に此の惨めな「人間」を救い上げてくれない。かくて、全く予期しない一人の旅人が我々の前に出現する。その旅人こそあの馬槽の中に来り給うた「彼」である。「彼」は正に此の唯一人の傷つき倒れている「人間」、祭司にもレビ人にも見棄てられてしまったまゝどん底に呻いている者に近づき、助け起し、抱き上げ、その傷を包む為に我等の唯中に来り給うた。しかしユダヤ人がサマリヤ人を白眼視し敵視したのにも勝って、世は、「彼」に敵対し、嘲笑と迫害とを以て彼に酬いた。十字架は正にその当然の帰結に外ならなかった。弟子達に対する訣別の時に語られた「人がその友の為に自分の生命を捨てる事、之よりも大きな愛はない」という御言葉は、かくて十字架に於て成就したのであった。

（石原秀志）

キリスト教の出発

―使徒行伝研究―（九）

二章一四節―三六節

半田梅雄

二章一四節以下三六節迄のペテロの演説は、その長さに於てその内容の堂々たる点に於て、使徒行伝中でも最も優れたものゝ一つである。然もこれがキリスト教の出発を意味する点より見て、更に重要である。聖霊によるバプテスマ（一の五、一の八）を受けたペテロは復活のイエス・キリストをこの時はっきり宣言した。そうしてイエスの十字架の死の意義と、イスラエルの歴史を通して計画を進め給う神のみ心とが力強く述べられるのである。この時以来、キリスト教は何万何億の人間によって繰り返し、繰り返しこの事実が語り明かされて来たのであり、又今も語られ、未来に向って語り続けられてゆくのである。個人の生涯にあっても実に数え切れない程の回数を持って語られる福音も、詮じつめるところこのペテロの演説の延長に外ならないのである。否むしろ同一内容を異なる時と場所と人によって語られると云ってよいのである。

この演説を次の五つに分つと理解に便利である。

1　ヨエル預言の成就　16～21
2　神の子イエスの十字架と復活　22～24
3　ダビデの預言　25～28
4　イエスとダビデ　29～35
5　むすび　36

先ず、十六節から二十一節までのヨエルの預言の引用であるが、これはヨエル書二章二八節～三二節にある。

かつて学んだヨエルの予言が、今ペテロ自身の実験を通して明らかにされた。一介の漁師の息子に過ぎなかったシモンやアンデレ、或はヨハネやヤコブ、更には取税人マタイの如き人物がこゝにはいる。又イエスの母マリヤ、マグダラのマリヤ、サロメなどの婦人たちもいる。そういう多くの学者にあらず詩人にあらざる者たちが、イエスの十字架の深い意義を知り、復活をこの眼で見、永遠の希望に生きる聖霊を受けたのである。十九節より二十一節まで、ヨエルの予言はキリスト再臨の予言としてペテロの確信となった。マタイ伝二四章に於けるイエスの予言をペテロは強い肯定をもって思い起していたであろう。ペテロ後書三章一二～一三にもこの事は語られている。

予言などと言えば科学万能を誇る近代人はすぐに迷信邪教の如く思い易い。然しキリスト教に於ける予言とは必ずしも未来に起るべき出来事の単なる予見を言うのではない。むしろ現実の虚偽と虚飾のベールをはぎとって、同胞、人類に対して眼覚めと悔い改めとをすすめる愛と義の

叫びであり、警声なのである。若しこのまま神を怖れず、真理に逆くならば、それに対する神の裁きは徹底的に臨むであろう。神の大いなる愛の救いにあずかった者は、一層痛烈に神の義の厳しさを怖れる者となるのである。予言者ヨエルにのぞんだ神の声もそうであった。「汝ら心をつくして我に帰れ、汝ら衣を裂かずして、心を裂き汝らの神エホバに帰るべし。」と。実に精神をつくし心をつくし一切にくだかれた心をもって神の前によりすがるものは幸である。彼らは必ず滅亡より救い出され、永遠のいのちのよろこびを持つに至るからである。否、既に持つことを許されたものとなった。

ペテロは兄弟姉妹を代表し、自己の体験の上に立って更に目の前の群衆の怖るべき罪悪について、十字架の事実を指摘した。それが二二節ー二四節である。

一体イエスの何処に十字架につけられねばならぬような理由があったか？彼は神の国の真理を語り続けた。彼は政治家も、宗教家も見捨てて置いた異邦人や罪人たちの中に永遠の友として立っていた。彼は悩める者苦しめる者、病める者に驚くべき回生の力を与えた。彼はパリサイ人や学者たちの如く自ら誇る者の偽善と虚飾の権威をはぎとってしまった。これらの数々の事実はすべての人の知る前で明らかにされていった。このことは愈々彼が神から遣わされたものであることを証明するばかりであった。そうゆう義人イエスを更に十字架に逐い上げ給うたのは実に神の定めた御計画に外ならなかった。然しそのことは君たちが自分の罪を云い逃れる理由とはならない。何故なら君たちは一人もイエスが神から遣わされた方であることを信じなかったし、従って神に背を向けて自分の勝手なことばかり考えていた証拠は歴然となったのである。こゝに人間の盲目の罪、即ち神について真の知識を持たない者の根本的な誤りと愚かさとがイエスを十字架へ十字架へと押しやったことも明らかである。

更にペテロは言葉をついで、イスラエルの人々が誇とするダビデ王の言葉によってイエスの復活の事実を明らかにする。（詩編十六の八～十一）ダビデには神に対する信仰があった。彼は神を信じた。彼は功績と共に多くの誤ちも犯したが、唯神を信じた。そして受くべき苦しみを受けた。そしてイスラエルの果すべき偉大なる使命を信じた。天地万物を創造し支配する神に依り頼む時、彼に復活の信仰は単なる夢でなかった。それは永遠の実在者に対する信頼の必然的な帰結であった。ペテロは主イエスの復活を始めに見た一人である。そしてその事実によってダビデの言葉の確実さに深く打たれたであろう。更にイスラエルの歴史を通して貫かれる神のご計画の驚嘆すべき事実に目を見はったことであろう。

今やイスラエルの歴史は完成された。彼らの祖先たちが実に数えきれない多くの苦しみの中から、ともかく守り通してきたエホバに対する信仰はイエスの復活に於て完成されたのである。すべての人一人一人が、この事実を信ずることによって、（神の御計画とイエスの御使命を信ずることによって）、救いはたちどころに彼にのぞむ、それは諸君が、この私たちについて見聞きしている通りである。しかもダビデが更に次のような慰めに満ちた言葉を我々に残している。神は私の主イエスに言われた。

「あなたの敵をあなたの足台にするまでは、わたしの右に座していなさい」と。神とイエスは御計画を逐次進め給う。今の時の混乱も、汚しよくも驚くには当らない。信じない彼らの報いは当然であるから、彼らは既に裁かれているではないか。混乱と汚しよ

くの中にあえいでいるのが、そのまま彼らの不信でありさばきなのである。

むすび、三六節、だからイスラエルの全家（のみならず全人類）は、この事をしかと知っておくがよい。あなた方の十字架につけたこのイエスを神は、主キリストとしてお立てになったのである。

雨の日

松本文助

この四月から二人の孫を保育所までバスを利用して送り届けている。楽しい労働である。

六月で兄は満二年九ヶ月、弟は満一年六ヶ月である。弟は丸々と肥って三貫目ほどあるが兄と同じ目方である。

バスの停留所までの約五分、下車して保育所まで約十分位を兄は歩き、弟はだっこするのである。兄弟共ジジに馴れて、送る途中では一度も泣いたりいやがったりしたことがない。

雨の日には母親が弟を背負い兄は歩くのである。この頃のように雨の日が続くと容易でない。今日も雨かと嘆息が出るのである。処が兄は却って大喜びである。雨カッパを着、洋傘を持ち、長靴をはくのはとても嬉しそうである。小降のときには洋傘を持たせまいとすると、泣いて持って行くのだと頑張る。長靴で水溜りの中をことさら面白がって通るのである。雨がはげしく降れば「雨々降れ降れかあさんが・・・」と歌いながら益々はしゃぎ出すのである。この子にとって晴れた日よりも雨の日の方が嬉しく楽しいのである。

この子供の心理を考えてみた。親たちにとって雨の日は厄介であるのに、子供にはこよなく嬉しく楽しくあるのである。これは多分大人のまねが出来ることも一つの理由であろうが、それよりも母親が一緒であると云うことが大きな原因のように思われたのであった。とたんに信仰の秘義が示されたのであった。

子供は母親と階に行くならば火の中でも、水の中でも勇んで行くに違いない。恰もイサクが燔祭の為に献げられるとも知らず「父よ火と柴薪とは有り、然れども燔祭の羔は何處にあるや」（創世記二二章）と父をして断腸のおもいをさせながら階に進み行ったように、子供にとって、母親は絶対であり、平安であり、天国そのものであろう。これは全く母に対する子供の信頼し切ったというか、表現の出来ない母と子の姿である。

イエスが「子供のように小さくならなければ、けっして天の国に入ることは出来ない」（マタイ伝一八の三塚本訳）と申されたことは、子供の母親に対する純粋無雑な信頼の姿を指すものであると思う。

実に、人はキリスト・イエスによる贖でただ信仰だけで神の子とせられるのである。

おもえば思うほど、罪とけがれが深ければ深いほど、感激の涙が一杯になる。地上にこのような幸福はない。

子として神と階にある時、どんな艱難もどんな迫害も、、死も亦何等の痛痒を感じない。

子供が雨の日を喜ぶように「患難をも喜ぶ」（ロマ書五の三）のではあるまいか。

手紙

お葉書有難うございました「天の神に近づけなくて困っております。この点丈が毎日の重荷です」というお言葉は身に沁みました。二十七日に○○○駅で罪の問題について「わからない」と仰言られたことと関連して毎日心にかけて居ります。御疑問のすべてが手に取るように私にはわかるような気がします。全く同じでないにしても、私も殆ど似たような不安な時を過ごし

て来た経験を持っていますから。

今のOさんの立場を想像しますと、わからないのは唯一つであること、そしてその一事に眼を覚ますことは、すべてを了解される時であると私にはそう思えます。わからない唯一つのことゝは何でしょうか。それはイエスが神の子であると、理性がどうしても承認しないのだと思うのです。誰も神を見たものはありません。神の存在又は性質についていろいろの意見を述べることは出来ます。しかし、存在するということも、しないということも、凡そ抽象的な、心理的な問題で、立場の相違、意見の相違として水かけ論に終わる場合が殆んど決定的でしょう。

しかるに、論が一度イエス・キリストに移りますと、問題はガラリ変ります。これは具体的、歴史的な問題であるからであります。歴史的な一人の人間が、万物を造り、万物を支配する神の嫡子であるというのは、信者達のイメージ或は假想的独断であって、客観的には精々宗教的天才に過ぎないのではないか、それが多くの未信者の持つ共通の結論かと思います。類い稀な人格として尊敬はする。しかしそれ以上は一歩も進むことは出来ない。それが歴史的人物としてのイエスの受ける一般的評価とも云えましょう。

それはしかし、事実であります。決して誤りではありません。確かにイエスはマリヤの子供として生れ、平凡な大工の息子として育ち、三十才にして宗教活動に入り、三年目に処刑されて十字架上に無惨な最後を遂げられたに違いありません。歴史的人間イエスはこゝで明らかに滅亡しました。理性と常識の教えるイエスの生涯はかくの如く単純明快なもので、そこに下らない辯護を用いるのは閑人の神学者位のものでありましょう。

然るにその歴史的に滅亡した筈の過去の人物のイエスが何故理性や常識をも越えて、現在の私を支配するのでしょうか。こゝに問題の鍵がひそんでいるようであります。私は何も好きこのんで二千年も前に死んだ一人のユダヤ人に傾倒しているのではありません。現代のような機械文明の世に生きてゆくのにそんな古い人間の説教が役に立つ筈はないのであります。然るにその古色蒼然たる過去の人物の死が、私の生と死に関係を持つのは、実に人生の一切の意義と価値とが彼に於て完き状態で示されているからであります。

イエス・キリストは実に「完き人」「完全なる人間」であります。この完全は鳥のように空も飛べ、もぐらのように土をくゞることが出来るという忍術使いのような意味の完全を指すのでないことは云うまでもありません。眞の人生とは何か、人が生きることの価値は何処にあるか、それを示す為に彼は世に生き、且死んだのであります。

私たちはイエス・キリストに随うことによって、彼にすべてを委ねることによって、この事実をはっきりと知ることが出来ます。彼にすべてを委ねた時、私たちは始めて、おのれの人生に納得することが出来ます。イエス・キリストと共に生きるということは、かゝる意味から常識と理性で維持されてきた人生観を超えてしまうことになるのであります。〝己が十字架を負うものでなければ私の弟子となることは出来ない。〟とイエスが言われたのは実にこの事であります。何故なら、完き人、完全なる人間である筈のイエス・キリストは、その完全さの故にすべての人に逆かれて、誤解せられて十字架のはりつけという惨酷な死を経験しなければならなかったのであります。（神に従うことは、イエスにとってすべての人の反逆とその結果としての十字架の死を意味したので

ある）神の子にして完全なる彼にしてこの最後とすれば、始めから不完全なる私たちが彼に随ってゆくということは、世の中を敵とする（己が十字架）ことが多くなるのは当然であります。

それでも、どれ程の苦難の生涯であっても義しき人の弟子であること、何よりも彼に在って永久にはぐらかされることのない、唯一絶対の味方を持つということは、実に、実に言い表わし難きよろこびであり、満足であります。これがすべてのクリスチャンに与えられた神の恵みなのであります。これがキリスト・イエスを通して始めて理解される神の愛であります。苦難を受けて立てば立つ程にこの眞事実は益々確かなものとなり、讃美は自ら口を突いて出るようになるのであります。

抽象的に、唯漠然と想像を通して神を考えても、それは何一つ益をもたらすことはありません。キリスト・イエスを通して、彼の聖書を通して、私たちは一切を知ることが出来るのであります。聖書を深く深く学ぶことが何より急務であります。独立と言い自主と言いましても、己れのみを頼る時、義を求めれば求める程、完きを欲すれば欲する程、唯みじめになる丈であります。例え法然さまにすかされて地獄え落ちても、唯一筋に彌陀の浄土を信じた時に親鸞にこよなき強さとよろこびとが訪れて来ました。死ぬるもキリスト、生くるもキリストとパウロが叫んだのも全世界が崩れる日はあってもイエスはだまさないという信仰があったからであります。

然しこゝに至るまでには、迷いに迷い、悩みに悩み、苦しみに苦しみ、悲しみに悲しみ抜いたギリギリ絶体絶命の魂の体験が前提としてあります。人に愛想をつかし、己れに愛想をつかし、頼る何ものもなくなった惨めな魂の嘆きを持たなくて、どうしてこの世のすべてを棄てることができるでしょうか。

キリスト教の信仰は娯楽や趣味のように片手間のもの、一時慰めのものではありません。己れの全人格、、全生涯をかける真剣勝負であります。この決意なくしては、何十冊註解書を読んでも、何百回講演を聞いても、真理は遂に扉を開いてくれないと思うのであります。御奮起を切に祈って居ります。

三一・六・一五

（半田）

後記

○〃雨々々の此頃も心に晴々々であることは感謝であります。〃これは塚本先生の御手紙の始めである。本当に気も心も滅入ってしまうような時に暗黒の雲を突きのけて神様の光を見に浴びるものは幸である。

○結婚、離婚問題と関連して試練が私たちに近よって来た。こんな小さなグループでも、この世的な足台にする余地がどこかに少しはあると見える。

○「私の信仰」について思いがけない方々から励ましや慰めを受けて恐縮してしまった。殊にご多忙な先生方が貴重な時間をさいて、手紙を下さった感謝は私にはよい天国土産である。

○麦は熟れ、栗は白い花房を梅雨の庭にひっそり落す。あの磨かれた美しい実が既にみごもった創造の不思議よ。

○西山荘で黒崎先生による夏期聖書講習会が行われてから早くも満一ヶ年が来ようとしている。あの時以来新しい交りをさせて頂いている兄弟姉妹も少くない。今年はどんな御計画に参加できるか。期して待つこと大きい。（半田）

昭和三十一年六月　発行
水戸無教会第十四号
実費十円〒共
編集兼印刷人　半田梅雄
発行人　松本文助
発行所　水戸市東原町
水戸幼稚園内　水戸無教会